

## 鞍川E遺跡Ⅱ

市道鞍川靈峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（2）

2012年7月

氷見市教育委員会

## 鞍川E遺跡Ⅱ

市道鞍川靈峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（2）

2012年7月

氷見市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、平成 23 年度に実施した富山県氷見市鞍川地内に所在する鞍川 E 遺跡 第二次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、市道鞍川塩峰線バイパス整備事業に先立ち、氷見市建設農林部建設課の依頼を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、氷見市教育委員会が主体となり、北陸航測株式会社が担当した。
- 4 調査面積は 361m<sup>2</sup>である。
- 5 調査期間は、平成 24 年 3 月 5 日より平成 24 年 4 月 20 日（実働 20 日）である。
- 6 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課（～平成 23 年度：生涯学習課）に置いた。事務担当者は次のとおりである。

平成 23 年度 課長：藤田栄治、課長補佐：荒井市郎、副主幹：大野 究、主任学芸員：廣瀬直樹  
平成 24 年度 課長：坂本研資、副主幹：大野 究、文化総括担当：天坂 正、主任学芸員：廣瀬直樹

- 7 発掘調査担当者は次のとおりである。
- |       |                     |            |
|-------|---------------------|------------|
| 監督員   | 氷見市教育委員会 生涯学習・スポーツ課 | 廣瀬直樹       |
| 管理技術者 | 北陸航測株式会社            | 沼田 淳       |
| 現場代理人 | 北陸航測株式会社            | 朝田 要       |
| 調査員   | 北陸航測株式会社            | 橋 日奈子 片山博通 |
- 8 整理作業は、遺物洗浄・注記等基礎的な作業は調査と並行して実施し、遺構図面作成、遺物実測、報告書作成・編集は調査終了後、平成 24 年 7 月まで実施した。
- 9 本書の執筆は、第 1 章・第 2 章第 1 節を廣瀬が、その他を朝田・橋・片山が担当し、編集は朝田が行った。
- 10 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課が保管している。
- 11 遺跡の略号は「KRKE-2012」とした。
- 12 調査参加者は次のとおりである。

発掘作業員：上野恵美子・上野節子・後山健作・遠藤幸雄・藤 利雄・清水不二雄・下野孝雄・

中川一美・藤井久征・紅谷清三・向 修誠・星敷幸子・山下 義

(以上、氷見市シルバー人材センター)

発掘補助員：荒井美子（北陸航測株式会社）

整理作業員：荒井美子・西村玲子・米倉和子（北陸航測株式会社）

- 13 調査・本書作成にあたり、下記の機関から多大なご協力を得た。記して感謝申し上げる。

氷見市シルバー人材センター・氷見市建設農林部建設課

(50 音順・敬称略)

## 目 次

第1章：遺跡の環境 .....	1
第1節：地理的環境 .....	1
第2節：周辺の遺跡 .....	1
第2章：調査の概要 .....	2
第1節：調査に至る経緯 .....	2
第2節：調査の経過 .....	3
第3章：調査の成果 .....	4
第1節：基本層序 .....	4
第2節：遺構 .....	4
第3節：遺物 .....	7
第4章：まとめ .....	9
引用・参考文献 .....	11
報告書抄録 .....	
奥付 .....	

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡対応表 .....
第2表 遺物出土遺構一覧表 .....
第3表 遺物観察表 .....

## 図 目 次

第1図 周辺の遺跡 .....
第2図 鞍川地区的既往調査位置図 .....
第3図 鞍川E遺跡 調査位置・グリッド配置図 .....
第4図 基本層序模式図 .....
第5図 調査区（KRKE-2011、2012）合成図 .....
第6図 調査区全体・遺構配置図 .....
第7図 調査区壁面土層断面図（東壁） .....
第8図 遺構実測図（1） .....
第9図 遺構実測図（2） .....
第10図 遺構実測図（3） .....
第11図 遺物実測図（1） .....
第12図 遺物実測図（2） .....
第13図 遺物実測図（3） .....

## 写 真 図 版 目 次

図版1 1. 調査区遠景（東から） 2. 調査区全景（垂直） .....
図版2 1. 遺構検出状況（南から） 2. SD 01-C土層断面（南から） 3～5. 包含層遺物出土状況（3. 東から 4. 西から 5. 東から） .....
図版3 1～3. 調査区東壁土層断面（北端から南端／西から） 4. SK 19 断面（東から） 5. SK 19 完掘（北から） 6・7. 遺物出土状況（S P 37：西から S P 22：北から） 8. 作業風景（SD 01 遺構掘削） .....
図版4 遺物写真1 .....
図版5 遺物写真2 .....
図版6 遺物写真3 .....

## 第1章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km<sup>2</sup>、人口は約5万2千人である。市域は、北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ、東側約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。

鞍川E遺跡が所在する鞍川地区は、氷見市のほぼ中央を流れる上庄川下流南岸に位置する。河畔に平野が開け、背後には丘陵山地が連なる。上庄川は、氷見市南西端の大釜山(501.7m)に発し、約22kmで富山湾に注ぐ河川であり、氷見市では長さ・流域面積ともに最大である。

鞍川E遺跡は、上庄川下流右岸の平野南端、標高約7mに立地し、背後には丘陵が迫る。平成21年度に氷見市教育委員会が実施した分布調査で発見された遺跡である。鞍川では昭和30年代に土地改良が実施され、整然とした水田が広がっている。査対象地の北側には、能越自動車道氷見北ICのアクセス道路として整備された一般国道415号(通称鞍川バイパス)が通る。また西側は、平成23年度に開業した金沢医科大学氷見市民病院の敷地となる。

### 第2節 周辺の遺跡

鞍川E遺跡が所在する鞍川地区の周辺では、平成14年度以降、一般国道415号(鞍川バイパス)の道路改良や、金沢医科大学氷見市民病院の建設等に伴い、断続的に発掘調査を実施している。また、現在の鞍川地区の周辺は、室町・戦国時代には、国人士豪鞍河氏が本貫地としていた場所とされる。以下、近年鞍川地区で本発掘調査を実施した遺跡について、概要を記しておく。

鞍川中A遺跡は、上庄川の支流、紅谷川と野手川の合流地点南側に立地する。平成14年度の調査では、近世に周辺が開墾される以前の湿地帯と川跡を確認し、古代から近世の遺物が出土した。

鞍川中B遺跡は、上庄川下流域に存在が推定される加納潟(仮称)に流れ込む流路のほとりの低地上に営まれた遺跡である。平成15・16年度の調査では、弥生時代中期の川跡から大量の土器が出土したほか、中世から近世の溜池状構造が見つかっている。また平成21年度に遺跡南東で実施した調査では、13～14世紀の遺構・遺物を確認している。

鞍川D遺跡は、鞍川E遺跡の北西側に立地する。平成15年度の調査では、井戸跡、流路、溝、土坑などの遺構が検出された。遺物としては珠洲焼や土師器皿、青磁、白磁、山茶碗など13世紀前半を主体に、12世紀後半から13世紀代いっぱいの遺物が出土している。建物跡等は見つかっていないが、いずれも13世紀前半の構築と考えられる井戸跡が3基検出されており、おそらく調査区の外側に向けて平安時代末から鎌倉時代始め頃に営まれた集落が広がっているものと推測される。

平成23年度に実施した鞍川E遺跡の第1次調査では、調査区中央を流れる流路跡から、弥生土器を中心に古代から中世の遺物が出土した。出土した弥生土器は、弥生時代終末期の白江式期のものである。そのほか、柱穴や溝などの遺構が検出された。また、流路からは、8世紀末～9世紀代と推測される瓦塔破片が出土した。

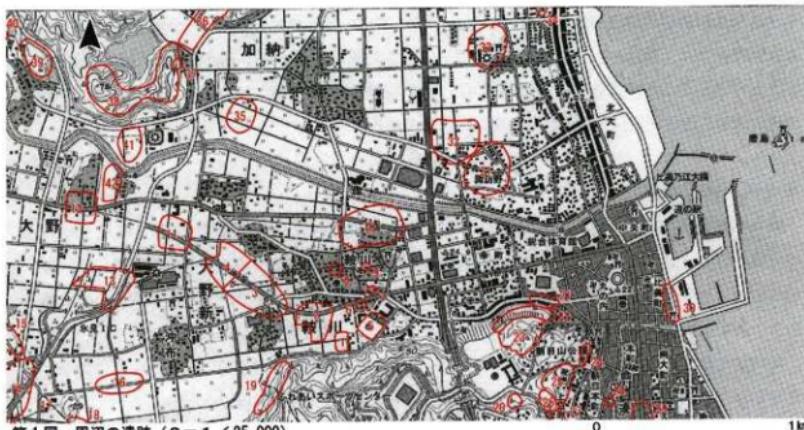
## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

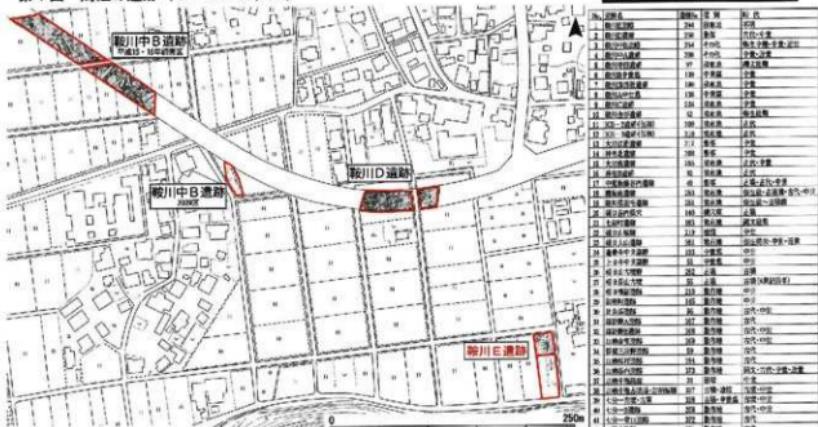
調査の原因となった市道鞍川靈峰線バイパスは、国道415号バイパスを起点とし、市道氷見駅朝日線を経由して国道160号に連絡する路線である。国道160号と市道氷見駅朝日線交差点の渋滞解消と、氷見高校と有磯高校の再編統合により開校された新氷見高校のアクセス道路として計画された。

平成21年11月30日には、氷見市教育委員会が建設予定地周辺の分布調査を実施し、新たに鞍川E遺跡の存在が確認された。試掘調査は、1598.08m<sup>2</sup>を対象に、平成23年7月と11月に実施した。試掘調査では、遺跡の南側を中心に遺構・遺物が確認され、1,153m<sup>2</sup>が本発掘調査の対象となった。

本発掘調査は、調査対象地南側約840m<sup>2</sup>を一次調査として平成23年10月から同12月に実施した。残る361m<sup>2</sup>（重複部分含む）は、二次調査として平成24年3月から同4月までの期間で実施した。



第1図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)



第2図 鞍川地区の既往調査位置図 (S = 1 / 5,000)

第1表 周辺遺跡対応表

## 第2節 調査の経過

### 二次調査

#### (1) 調査の方法

本調査にあたっては、表土掘削後に世界測地系（測地成果 2011）平面直角座標系第VII系を用いて5m間隔にグリッド杭を設定し、東西をX軸、南北をY軸とした。X軸方向に西からアラビア文字、Y軸方向に南からアルファベットを割り振ってグリッド番号を設定した（第3図）。

表土はバックホウで、遺物包含層は人力で掘削した。引き続き遺構を検出し、遺構略測図を作成した。遺構は、半蔵もしくはセクションベルトを残して掘削し、土層を記録した後、完掘した。遺構の測量は空中写真測量で実施し、必要に応じてトータルステーションによる補備測量を実施した。

#### (2) 調査の日程

平成24年3月5日より調査を開始した。3月14日に調査区周辺の整備として、安全柵を設置した。15日にバックホウによる表土掘削を開始し、16日に完了した。

3月19日にグリッド杭を設置した。

3月21日より発掘作業員による包含層掘削を開始し、4月3日に終了した。

3月30日より遺構検出を開始し、4月4日に終了した。

3月30日より平板による略測図作成を開始し、4月3日に終了した。

4月3日に遺構検出状況写真を撮影し、遺構掘削を開始した。以後、平面図・断面図等の図面作成および遺物の取上げを順次実施し、調査を進めた。

4月10日に全ての遺構掘削を終了し、4月12日にローリングタワーによるブロック撮影を行った。

4月13日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量および土量管理測量を行った。

4月14日から18日にかけて補備測量、下層確認等を実施し、資材を撤収した。

4月19・20日にバックホウによる調査区の埋戻しを行い、調査を終了した。



第3図 鞍川E遺跡 調査区位置・グリッド配置図 (S = 1/1,250)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

地山の地形は山側である南から北へ向けて低くなっている。遺物包含層は地形に応じて堆積しており、最も厚い北端部で約0.5mを測る。表土と遺物包含層の間には、造成土とみられる約0.7mを測る厚い盛土がみられる。

調査区南西部には黒色砂質シルトの包含層はほとんど存在せず、厚さ約0.5mを測るにぶい黄褐色砂質シルトの包含層が部分的に広がる。

第I層：水田耕作土（にぶい黄褐色細粒シルト）、第II層：造成土2層（灰黄褐色細粒砂質シルト・灰黄褐色粘質土）、第III層：遺物包含層（黒色細粒砂質シルト・にぶい黄褐色細粒砂質シルト）、第IV層：地山（黄色中粒砂質シルト）である。遺構検出面は第IV層上面である。第IV層には砂岩ブロックが混入している。

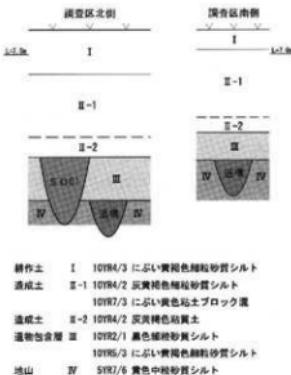
### 第2節 遺構

今回の調査では、自然流路・溝（SD）、土坑（SK）、ピット（SP）を検出した。調査区は中央を南北に流れる自然流路SD 01により東西に分断され、遺構は調査区の北西および南東（SD 01東岸）に集中している。遺構の埋土は、古代以降に堆積したと考えられる第III層（遺物包含層）を主体とする。第III層は弥生時代終末期～中世の遺物を含むことから、堆積時期は中世～近世の間と推定できる。壁面の土層観察の結果、遺構形成時期は第III層上面と第IV層上面に分かれ、遺構出土遺物の観察結果から、第III層上面の遺構の時期は近世、第IV層の遺構の時期は古代～中世のものである可能性が高い。

なお遺構番号については、現地調査当時のものを本書でも使用しているため、番号が欠番となっているものがある。ここでは実測した遺物が出土した遺構を中心に詳述し、遺物が出土した遺構については別途一覧表でまとめることとする。

#### 自然流路・溝

SD 01（第6・8図）グリッドJ 2～M 3の範囲に位置し、調査区中央を南北方向に継続する流路である。検出長18.7m、最大検出幅3.04m、深さ0.46～0.85mを測る。調査区の南側は東西方向に延びる丘陵に南北方向の谷地形があり、この谷が当遺構の延長上に位置することから、SD 01はこの谷からの流路であると考えられる。前年度に調査を行った南側隣接調査区のSD 01と同一遺構である。埋土は黒色シルトを基調とし、褐灰色砂質シルトや黄色砂質シルト（地山）ブロック等が混じる。また遺構上面中央に灰色沙が南北方向に貫く形で溝状に堆積している。流路の肩部や底面には砂岩ブロックが数箇所確認できる。遺物は弥生終末期～中世の土器などがあり、灰色砂層から弥生土器（終末期）、古墳土師器、古代須恵器、珠洲焼、石製品（剣片）が、それ以外から弥生土器（終末期／遺物番号21、



第4図 基本層序模式図（S=1 / 40）

以下番号のみ)、古墳土師器の高杯(19、28)、中世土師器皿(47)、古代須恵器(53・57・58)、株洲焼(66・67・68・70・71)、土製品(土錐50)、獸骨、鉄滓が出土している。そのなかには漆膜が付着した須恵器などもみられる。

**S D 02** (第6・9図) 調査区北西部、グリッドL 1の範囲に位置し、南東-北西方向に流れる溝である。検出長3.15m、最大検出幅0.7m、深さ0.25mを測る。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は弥生終末～古墳初頭の壺、器台(24)、装飾器台(27)が出土した。

**S D 03** (第6・7図) 調査区南東部、グリッドJ 4の範囲に位置し、東西方向に流れる溝である。検出長2.7m、最大検出幅0.85m、深さ0.25mを測る。東壁以東に延びる。埋土は黒色シルトを基調とし、上下2層に分かれる。遺物は古墳土師器の小片が中心であり、上層埋土からは12～13世紀の中世土師器皿(48)が出土した。

**S D 04** (第6・9図) 調査区北西部、グリッドL 1の範囲に位置し、東西方向に流れる流路である。検出長0.55m、最大検出幅0.7m、深さ0.49mを測る。西壁以西に延びる。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の壺(5)、高杯(29)、不明土製品が出土した。

**S D 05** (第6・9図) 調査区北西部、グリッドM 1の範囲に位置し、南東-北西方向に流れる流路である。検出長2.0m、最大検出幅0.5m、深さ0.46mを測る。西壁以西に延びる。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は弥生終末期の器台、古墳～古代土師器の小片、不明土製品が出土した。

**S D 06** (第6・9図) 調査区南部、グリッドJ 3の範囲に位置し、東西方向に流れる流路である。検出長1.55m、最大検出幅0.35m、深さ0.16mを測る。西端部をS D 01に切られる。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の高杯、古代須恵器杯身(54)が出土した。

**S D 07** (第6・9図) 調査区北西部、グリッドL 1の範囲に位置し、東西方向に流れる流路である。検出長0.45m、最大検出幅0.36m、深さ0.27mを測る。西壁以西に延びる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の壺(15)、鉢(39)などが出土した。

## 土坑

**S K 01** (第6・9図) 調査区中央南西、グリッドK 2の範囲に位置するやや大型の楕円形土坑である。最大径0.88m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器小片が出土した。

**S K 02** (第6・9図) 調査区北側、グリッドM 2の範囲に位置する円形の土坑である。最大径0.5m、深さ0.3mを測る。埋土は褐灰色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器が出土したが、小片のため実測していない。そのほか鉄滓が出土した。

**S K 07** (第6・9図) 調査区北西、グリッドM 1の範囲に位置する円形の土坑である。最大径0.65m、深さ0.25mを測る。埋土は単層で黒褐色シルトを基調とする。遺物は古代須恵器が出土した。

**S K 09** (第6・9図) 調査区西側、グリッドL 1に位置する円形の土坑である。最大径0.65m、深さ0.43mを測る。埋土は上層がにぶい黄褐色シルトを、下層が褐灰色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器(1・35)が出土した。

**S K 10** (第6・9図) 調査区中央北東、グリッドL 3の範囲に位置する円形の土坑である。最大径0.52m、深さ0.3mを測る。埋土は褐灰色を基調とする。遺物は古墳土師器・古代須恵器が出土したが、小片のため実測していない。

**S K 11** (第 6・9 図) 調査区北東、グリッド M 3 の範囲に位置する楕円形の土坑である。最大径 0.87 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器 (37) が出土した。

**S K 13** (第 6・10 図) 調査区北側、グリッド M 2 の範囲に位置する円形の土坑である。最大径 0.64 m、深さ 0.18 m を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器、鉄滓（釘か？）が出土した。

**S K 16** (第 6・7 図) 調査区中央東端、グリッド K 4 に位置する円形の土坑である。調査区以東に拡がる。東壁で径 0.96 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器 (17・25) が出土した。

**S K 18** (第 6・10 図) 調査区西側、グリッド L 1 に位置する円形の土坑である。S P 77 に切られる。最大径 0.4 m、深さ 0.25 m を測る。埋土は灰褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器 (23)・珠洲焼が出土した。

**S K 19** (第 6・10 図) 調査区南側、グリッド J 2 の範囲に位置し、平面形が隅丸長方形を呈する大型の上坑である。東側を S D 01 に切られる。長軸 1.71 m、短軸 1.1 m、深さ 0.3 m を測る。埋土は上層が黒褐色シルトを、下層が褐灰色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器・古代須恵器 (65)・珠洲焼が出土した。

**S K 20** (第 6・8・10 図) 調査区中央北東、グリッド L 3 の範囲に位置する円形の土坑である。S P 94 に切られる。最大径 0.33 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は褐灰色シルトを基調とする。遺物は珠洲焼 (74) が出土した。

#### ピット

調査区内で検出したピット数は 103 を数える。調査区北西および S D 01 東岸に集中しており、規則性を持つものが一定量みられた。以下、実測した遺物が出土した遺構を中心に記述する。

**S P 14** (第 6・10 図) 調査区中央北西、グリッド L 1 に位置する。最大径 0.41 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は中世土師皿 (49) が出土した。

**S P 15** (第 6・10 図) 調査区中央やや北西、グリッド L 2 に位置する。最大径 0.39 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は褐灰色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器 (32) が出土した。

**S P 22** (第 6・10 図) 調査区北側、グリッド M 2 に位置する。最大径 0.3 m、深さ 0.17 m を測る。埋土は褐灰色シルトを基調とする。遺物は古代須恵器 (56) が出土した。

**S P 24** (第 6・10 図) 調査区西側、グリッド L 1 に位置する。最大径 0.18 m、深さ 0.23 m を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古代須恵器、鉄滓が出土した。

**S P 37** (第 6・10 図) 調査区中央南東、グリッド K 3 に位置する。最大径 0.25 m、深さ 0.19 m を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は珠洲焼 (72) が出土した。

**S P 61** (第 6・10 図) 調査区中央南東、グリッド J 3 に位置する。最大径 0.4 m、深さ 0.3 m を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の小片、骨が出土した。

**S P 77** (第 6・10 図) 調査区北西、グリッド L 1 に位置する。最大径 0.27 m、深さ 0.21 m を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は弥生終末期の器台が出土した。磨滅が著しく小片のため図示していないが、装飾器台の器受部の可能性が高い。

**S P 87** (第 6・10 図) 調査区南東端、グリッド J 4 に位置する。最大径 0.2 m、深さ 0.13 m を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の壺 (10) が出土した。

### 第3節 遺物

今回の調査では、弥生土器（終末期）、古墳土師器、古代須恵器、古代土師器、中世土師器、珠洲焼、その他陶磁器類（白磁、越中瀬戸）、土製品（土錠、不明土製品）、金属製品、石製品（磨石、砥石、剥片）、動物遺体（種子、獸骨）など、遺物整理箱24箱分の遺物が出土している。本書ではそのうち75点を図示した。遺物の記載は種別ごとに行い、観察表にデータを記載した。本文中で出土地点にふれていないものは基本的にⅢ層（包含層）出土である。

なお珠洲焼については隣接する一次調査の報告書と同様、吉岡康暢氏の器種分類および7期編年（吉岡 1994）に準拠した。暦年代はⅠ期：12世紀後半、Ⅱ期：13世紀前半、Ⅲ期：13世紀中葉～1270年代、Ⅳ期：1280年代～1370年代、Ⅴ期：1380年代～1440年代、Ⅵ期：1450年代～1470年代、Ⅶ期：1480年代～1500年代と比定されている。

#### （1）土器・陶磁器類（第10図～12図）

##### 弥生土器・土師器

1～8は壺である。1は有段壺の口縁部。口縁部軽く外傾し端部に向かって直線的に延びる。端部はそのまま丸くおさめる。器厚は薄く内外面ミガキ調整を施す。SK 09から出土した。2は口縁部が2段を呈する壺。口縁は体部からやや外傾して伸び、端部で再び段を形成し摘み上げる。端部はそのまま丸くおさめる。有段口縁下段には凹線と円形刺突を、上段下部にはキザミを施す。3は直口壺の口縁下部～肩部。口縁部に凹線を施す。4、5は有段壺の口縁。4は口縁下部に2連の円形浮文を施す。5は内外面にミガキ調整を、外面に赤彩を施す。SD 04から出土した。6は有段口縁の壺。口縁部が外傾し、端部に向かって直線状に伸びる。口縁下端に稜を持つ。内外面にミガキ調整を施す。7は大型の有段壺である。口縁はやや外傾し端部に向かって直線的に伸びる。8は有段壺の口縁。口縁端部で外側に返して2重とし、下端部をおさえて有段部をつくる。外面にヨコナデを施す。9は短頸壺である。体部の最大径を下半に持つ長胴型の形態であり、口縁部は軽く外傾し端部は丸くおさめる。胴部は外面にタテハケ、内面上部にヨコハケを施す。時期は古墳時代前期前半である。

10～18は壺である。10・11是有段壺の口縁部。10の口縁はやや外傾し、端部に向かって直線的に伸びる。内外面ヨコナデを施す。SP 87から出土した。11の口縁はやや外反して伸びる。12は擬凹線壺。口縁はやや外傾して伸び、端部が外反する。口縁下端に粘土接合痕が残る。13是有段壺の口縁～体部。口縁部は直立し、端部はそのまま丸くおさめる。体部外面の調整はハケメである。14、15は受口壺。14の肩部は口縁に向かって強く屈曲し口縁部を上方に摘み上げる。口縁下端に稜を持つ。口縁部内外面にヨコナデを施す。15は口縁端部で内側に屈曲し、そのまま直立する。調整は内面にヨコハケ、外面にタテハケを施す。SD 07から出土した。16は付加状壺の口縁。I層から出土した。17は平縁壺。口縁部が外方に屈曲して伸び、端部は面取りして外側に向かっておさめる。SK 16から出土した。18は壺壺類の底部である。底部外面中央を輪高台状に仕上げる。内外面に縱方向の板ナデを施す。

19～34は高杯・器台である。19～21は高杯の杯部。いずれも有段高杯である。19は口縁が端部に向かってやや外反気味に伸び、端部はそのまま丸くおさめる。外面にミガキ調整がみられる。SD 01から出土した。20は口縁が端部に向かってやや外傾し直線的に伸びる。口縁上端は丸くおさまり、下端は垂下する。内外面ミガキ調整を施す。21は体部がやや内湾し、口縁は下部でやや屈曲し端部に向かって外反して立ち上がる。杯下部に明瞭な段を持ち、下端が垂下する。内外面ハケのちミガキ調整を施す。

S D 01 から出土した。22～25 は器台の口縁部。22 は擬回線器台。口縁部がやや外反し端部に向かつて直線状に伸びる。上端はそのまま丸くおさめ口縁下端は垂下する。内外面ミガキ調整を施す。23・24 は有段器台。いずれも端部付近で屈曲し、ほぼ垂直に伸びる短い受部を持つ。口縁下端がやや垂下する。内外面ミガキ調整のうち、24 は外面に赤彩、25 は内外面に赤彩を施す。24 は S K 18 から、25 は S D 02 から出土した。25 は小型器台の口縁部。体部がやや内湾気味に伸び、端部を面取りする。体部は外面ハケ後ミガキ調整、内面ミガキ調整で、口縁内外面にヨコナデがみられる。S K 16 から出土した。26 は小型の器台の受部である。口縁部がやや外反気味に立ち上がる。胎土に混和材として赤褐色砂粒が多く含まれる。内外面ミガキ調整を施す。透孔が 2 カ所みられる。試掘トレンチで取上げた。19～26 の時期は、19～25 は弥生時代終末期～古墳時代初頭であり、26 は古墳時代前期である。

27 は装飾器台である。器受部の外面にミガキ調整を施し、上面・口縁部外面は全面に、下面には放射状に赤彩を施す。透孔は台形状を呈していた可能性が高く、同一方向を向き 12 カ所程度施されていたと考えられる。器受部の径が約 18 cm と大型なことから、帰属時期は全体的な出土遺物の傾向よりやや古相、月影 I 式期のものと考える。

28～31 は高杯の脚部である。28 は外面ハケのちミガキ調整を施す。S D 01 から出土した。29 は摩滅が著しく調整は不明である。S D 04 から出土した。30 は外面に縦方向のミガキ調整を施すが摩滅が著しく不明瞭である。31 は外面にミガキ調整のち赤彩を施す。32～34 は器台の脚部である。32 は外面にミガキを、内面にハケ調整を施す。透孔が 1 カ所みられる。S P 15 から出土した。33 は外面にミガキ調整を施す。透孔は 4 方向に施す。34 の調整は摩滅が著しいため不明である。透孔は 4 方向に施す。28～34 の時期はいずれも低脚化が進行する古墳時代初頭以降のものである。

35～39 は鉢である。35～38 は有段鉢である。35 は体部半ばで内側に屈曲し、直立気味に立ち上がる体部から短い口縁が外傾して伸びる。体部外面はハケ調整、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は板ナデを施す。S K 09 から出土した。36 は体部が底部から緩やかに内湾気味に立ち上がる。口縁部は軽く外反して伸び、端部を丸くおさめる。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。37 は口縁部がやや外反気味に伸びる。内外面にミガキを施す。S K 11 から出土した。38 の口縁部はやや外反気味に伸びる。内外面とも摩滅が著しいが、体部内面の一部にミガキ調整がみられる。39 は丸みを帯びた体部から口縁部がぐの字に屈曲し、口縁端部に向かってやや内湾気味に伸びる。端部は丸くおさめる。外面ハケ調整である。S D 07 から出土した。35・36 は弥生時代終末期、37～39 は古墳時代初頭～前期のものである。

40・41 は蓋である。いずれも鉢をもつ。40 の体部はやや外反して伸び、端部を丸くおさめる。外面はミガキ調整、内面はハケ調整を施す。41 の鉢頂部は瘤むが、先端部はそのまま仕上げる。体部外面にミガキ調整を施す。

42・43 はいずれも鉢形のミニチュア土器である。

44 は椀である。口径 14 センチ前後。平底の底部から体部が緩やかに立ち上がる。摩滅が著しく調整は不明である。45 は杯である。丸底の底部から緩やかに体部が立ち上がり、口縁部は内側に屈曲して直立する。端部は丸くおさまる。46 は無台椀。体部が直線状に立ち上がり、半ばで外側に軽く屈曲して伸びる。端部はそのまま丸くおさめる。口径は 12 cm 台である。時期は 10 世紀と考えられる。

47・48は中世土師器の皿である。47は柱状高台を持つ。高台が裾で広がり、底部はロクロナデで仕上げる。SD 01から出土した。48の体部は内湾気味に緩やかに立ち上がり、口縁部はそのまま薄く仕上げる。ロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。SD 03から出土した。時期は47が11世紀後半～12世紀前半、48が12～13世紀である。49は中世土師器の皿か。体部が口縁端部に向かって直線状に伸びる。SP 14から出土した。

#### 須恵器

52～60は杯である。52・53は杯蓋である。52は杯G蓋、53は杯B蓋である。53は生焼けである。52はIII層、53はSD 01から出土した。54は杯身である。SD 06から出土した。55は杯A身である。56～60は杯B身である。高台は56～58には低い高台が、59・60には比較的高い高台を貼り付ける。60には焼き膨れがみられる。56はSP 22、57・58がSD 01から出土した。

61は短頸壺である。肩部が強く張り、凹線が1条巡る。体部外面にケズリ調整を施す。62は横瓶である。口縁端部をつまみ出し、内側に凹線を一条巡らせる。体部外面にはタタキのちカキメ、内面は同心円文の押圧具痕が残る。61、62の時期は8世紀と考えられる。63～65は壺である。63の体部外面には平行タタキ、内面に同心円文の押圧具痕が残る。時期は8～9世紀である。64は底部である。丸底の外面にはタタキ、内面には同心円文の押圧具痕が残る。65は大壺の口縁部である。口径約66cmを測る。口縁部に外面に波状文を施す。63・64はIII層から、65はSK 19から出土した。時期は52が7世紀後葉～8世紀初頭、それ以外は8世紀半ば～9世紀と考える。

#### 珠洲焼

66～73は珠洲焼である。66～71は鉢・擂鉢である。66～69は口縁部である。いずれも体部は口縁に向かって内湾気味に立ち上がり、端面がほぼ水平である。66の口縁部端面には凹線が1条巡る。I期。67・48はII期。69は片口部分である。内面に卸目が数条みられる。70は体部。内面に流水状の卸目を施す。時期はII期。71は壺の底部。底径約20cmを測る大型品である。内面に1単位13条の卸目を放射状に施す。時期はIII～IV期。70・71は破損後に被熱したため、煤が全体に付着している。66～68・70・71がSD 01から出土した。

72は装飾壺である。体部外面に草木状の櫛目線刻文を施す。時期はII～III期。SP 37から出土した。73は壺である。体部外面にタタキ、内面に当て具痕がみられる。SK 20から出土した。74は壺の底部である。

#### その他

75は白磁碗の口縁部。体部が口縁端部に向かって直線的に立ちあがる。端部はそのまま丸くおさめる。器厚3mm程度で釉が薄い。胎土に黑色粒がみられる。体部外面に蓮弁文のしのぎの可能性がある不明瞭な線がみられることから青磁の可能性もある。

50は管状土錐である。樽形である。SD 01から出土した。51は土製支脚である。短脚類である。表面が完全に剥離していることもあり、被熱痕は確認できない。

## 第4章　まとめ

今回の調査で得られた知見を整理しまとめにかえたい。

調査では自然流路・溝7条、土坑21基、ピット103基を確認した。遺構の大半が調査区の北西部および自然流路SD 01東岸に集中していた。遺構の埋土は大きく①黒褐色シルト、②黒褐色シルトを基調とするが地山などをブロック状に一定量含むもの、③褐灰色シルトの3種類に大別できる。柱痕を伴わないため掘立柱建物と断定できないが、調査区北西のピット群に3棟、SD 01東岸のピット群に1棟、配列に規則性があるものがある。いずれも縦柱建物と考えられ、ピット径の小さいものが多い。また出土した中近世の遺物が中世前半のものが大半であることから、この時期のものである可能性が高い。

調査区中央を南北に縦断する自然流路SD 01は、昨年度調査した隣接調査区のSD 01と同一のものである。埋土はにぶい黄褐色／灰黄褐色砂および黒褐色砂質シルトが主体であり、それぞれを基調とする層が互層をなして堆積する。黒褐色砂質シルトは第III層（遺物包含層）に由来し、にぶい黄褐色／灰黄褐色砂は谷からの流れ込みと考えられる。流入時期は古代から近世にかけて主に4期に分かれると考えられるが、出土遺物に明確な時期差はみられなかった。ただ、遺構上面が造成土に切られているため、近世以降も存続していた可能性も否定できない。

遺物は、第III層およびSD 01から弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器、須恵器、珠洲焼などが多く出土している。弥生土器・古墳土器の器種は壺、甕、鉢、蓋、高杯、器台等がある。その特徴として、①小型器台形土器や装飾器台の出土、②当該時期の山陰や近畿など外来系の影響がみられる土器の出土、③器台や高杯に棒状脚が少ないことに加え、低脚化が進展していること、などがあげられる。以上の傾向および遺物の観察結果から、弥生時代終末期の白江式を中心とし、古墳時代前期までの土器群に相当すると考えられる。また、この時期の遺物のなかで特筆すべきものとして、装飾器台が挙げられる。装飾器台は弥生時代終末期から古墳時代早期に限定された器種であり、主に北陸南西部を中心に流通する。特に古相のものは外来系の土器が波及する前段階に地域間の交流が始まったことを示唆するとされる。県内では富山市以西でのみ出土事例あり、氷見市内では小久米A遺跡で、近年の調査では高岡市藏野町東遺跡で12個体以上出土している。装飾器台は様々な研究者により分類されており、受部径や器受部口縁・透孔の形態分類、施された装飾や赤彩などに着目されている。当遺跡の出土した装飾器台は補分類A 2類にあたり、器受部口縁が上下に拡張するものである。また器受部上面・口縁部外面の全体に赤彩が施され、器受部下面に装飾状の赤彩が放射状に施される。透孔が同一方向を向いていることを含め、能登の影響をうけたものと考えられる。

古代の遺物は須恵器の杯・壺・甕・横瓶などのほか、土器は杯・皿などが少量出土しており、帰属時期は8世紀半ば～9世紀中頃までのものを中心とし、僅かに8世紀前半に遡るものと11～12世紀に遡るものがある。中世の遺物は12世紀後半～13世紀前半の珠洲焼がほとんどであり、出土量も少ない。時期の明確な遺構が少ないとあわせ、古代から中世前半にかけて当遺跡は集落の中心から外れた縁辺部であったと考えられる。今回の調査は鞍川E遺跡の二次調査であり、南側に隣接する一次調査の結果と出土遺物の時期との整合性がある。古代・中世の遺跡である鞍川D遺跡が北西数十mに位置していることから、当該期の集落の中心は当遺跡の北西側に広がる可能性が高い。

前回の調査とあわせてみてみると、出土遺物の時期が弥生時代終末期～古墳時代初頭、8世紀半ば～9世紀、12世紀後半～13世紀前半に集中しており、当遺跡周辺地域では、これらの時期を中心に人々の営みが盛んであったと考えられる。

## 引用・参考文献

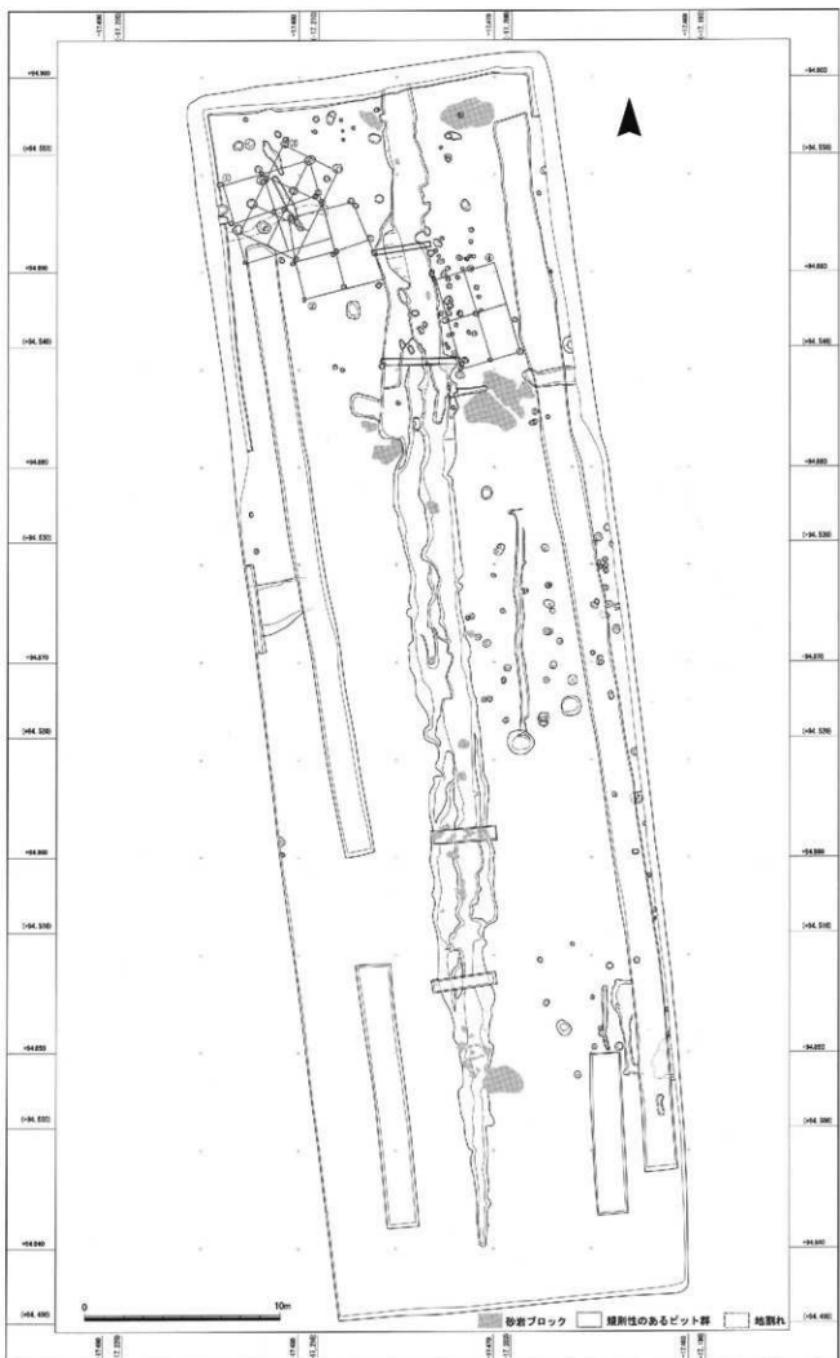
- 青山 光 2010 「富山市東郷出土の装飾骨盆について」『富山考古学研究』第13号 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 西野正一 2012 「越中の古墳時代の器物群」『大系』第31号 富山考古学会
- 西野正一 2009 「装飾骨盆の成立と展開」『日本考古学会誌』第22号(2009年)「古代の器物」
- 西野正一 2008 「越中・北陸の古墳時代の器物群」『日本考古学会誌』第21号(2008年)「古代の器物」
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 「高岡市立高岡生糸堂遺跡発掘調査報告書(総合)」石川県埋蔵文化財センター
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1998 「五社跡発掘調査報告書(第一部分)」石川県埋蔵文化財調査報告書第7号
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006 「下老子坂川遺跡発掘調査報告書(第五分冊)」石川県埋蔵文化財調査報告書第34号
- 見島徳文 1965 「水見足跡名考」『足見足跡名考』見島徳文新刊
- 光見市 1999 「水見足跡史」『資料編7 目次編』
- 光見市 2000 「水見足跡史」『資料編1 民俗編』
- 光見市 2006 「水見足跡史」『資料編2 神社・寺社』
- 光見市 2006 「水見足跡史」『資料編3 人物・歴史』
- 光見市 2006 「水見足跡史」『資料編4 伝統文化』
- 光見市埋蔵文化財調査委員会 2003 「高岡市立高岡生糸堂遺跡発掘調査報告書」『高岡市埋蔵文化財調査報告書第44号』
- 光見市埋蔵文化財調査委員会 2009 「高岡市立高岡生糸堂遺跡発掘調査報告書」『高岡市埋蔵文化財調査報告書第45号』
- 光見市埋蔵文化財調査委員会 2010 「高岡市立高岡生糸堂遺跡発掘調査報告書」『高岡市埋蔵文化財調査報告書第55号』
- 光見市埋蔵文化財調査委員会 2010 「高岡市立高岡生糸堂遺跡発掘調査報告書」『高岡市埋蔵文化財調査報告書第56号』
- 光見市埋蔵文化財調査委員会 2010 「高岡市立高岡生糸堂遺跡発掘調査報告書」『高岡市埋蔵文化財調査報告書第57号』
- 光見市埋蔵文化財調査委員会 2010 「高岡市立高岡生糸堂遺跡発掘調査報告書」『高岡市埋蔵文化財調査報告書第58号』
- 光見市立博物館 2006 「お祭り・竹林の謡にせまる」『一山城・寺社・桜井氏』
- 鶴谷介 2009 「越中・北陸の古墳時代の研究 - 古墳成立期の北陸を舞台として - 」雄山閣
- 吉岡成樹 1994 「中世復惣の研究」古川弘文館

遺構	地区	最大 深さ (m)	深さ (m)	出土遺物			備考		
				土器		その他の 遺物			
				種別	形態				
SD	01 2.3 ~M	3.04/ 2.34	0.46/ 0.85	弥生土器(火 照、古十輪器、 古代土器等、古 代灰陶器、朱漆器	弥生土器(火炎 照、古十輪器、 古代土器等、古 代灰陶器、朱漆器	土師・鉄鋤・ 鍬・刀・筒・古代 土器等、火照、 朱漆器等、小片	土師・鉄鋤・ 鍬・刀・筒・古代 土器等、火照、 朱漆器等、小片	検出長18.7m、SD06・SK19を切 る	19.21 50.63 57.58 66.68 70 71
	02 L1	0.7	0.25	弥生土器・土器等	弥生土器・土器等	-	-	検出長3.15m	24.27
	03 K4	0.85	0.25	土師器・中世土師 器	高杯か口沿台、中世土師器皿	-	-	検出長3.7m	48
	04 L1	0.7	0.49	弥生土器・土師器	赤彩绘、高杯、土師器小片	不明・不製品	検出長0.55m	-	29
	05 M1	0.5	0.46	弥生土器・土師 器・須恵器	土師器等、土師器小片、須恵器 等	土師支承	検出長2.0m	-	-
	06 J3	0.35	0.16	弥生土器・土師 器・須恵器	高杯、土師器小片、須恵器 等	-	検出長1.55m	54	-
	07 L1	0.36	0.27	弥生土器・土師器	鍬、鉢、筒形	-	検出長0.45m	15.39	-
SK	01 K2	0.68	0.3	土師器	鍬、小片	-	-	-	-
	02 M2	0.5	0.2	土師器	小片	鉄鋤	-	①鉄鋤が4箇所×2箇の南北棒建柱 跡跡か(SK02・05-06-15-18- SK12-14)	-
	04 M1	0.67	0.32	土師器	壺、火杯か壺台、小片	-	-	-	-
	05 L1	0.65	0.23	土師器	小片	-	①	-	-
	06 M2	0.65	0.3	土師器	須恵器小片(口縁修正)	鉄鋤?	①④	-	-
	07 M1	0.65	0.25	須恵器	須恵器	-	-	-	-
	09 L1	0.66	0.43	土師器	小片(口縁含む)	-	-	1.35	-
	10 L3	0.52	0.3	土師器・須恵器	土師器高杯か壺台・小片、須恵器 等、火杯小片	-	-	-	-
	11 M3	0.87	0.2	土師器	鉢、小片	-	-	37	-
	13 M2	0.64	0.18	土師器	土師器小片	-	-	-	-
	14 L2	0.43	0.15	土師器	土師器小片	-	-	-	-
	15 L1	0.48	0.15	土師器	土師器小片	-	①	-	-
	16 K4	1	0.24	弥生土器・土師器	弥生土器等、土師器等	-	-	17.25	-
	18 L1	0.4	0.25	土師器	高杯(底含む)	-	-	23	-
	19 J2	1.71	0.3	土師器・須恵器、 鏡	土師器・須恵器、鏡、高杯小片台・小 片、須恵器底?、鏡、須恵器、中食 土師器小片	SD01に切られる	-	66	-
	20 L3	0.33	0.15	須恵器	鏡	-	SP04に切られる	74	-
	21 M2	0.45	0.3	土師器	小片	-	-	-	-
	01 K2	0.21	0.19	土師器	土師器小片、中止上解器? 小片	-	②2箇×2箇の南北棒建柱跡 跡跡か(SP01・ 05-15-16-17-19)	-	-
	03 K2	0.42	0.3	土師器	土師器小片	-	-	-	-
	05 L2	0.19	0.22	土師器	土師器小片	-	②	-	-
	06 L2	0.2	0.2	須恵器	鏡	-	-	-	-
	09 L2	0.34	0.3	土師器	小片	-	-	-	-
	10 L2	0.45	0.25	土師器	小片	①	-	-	-
	14 L1	0.41	0.2	土師器	中止上解器	①	-	49	-
	15 L2	0.59	0.1	弥生土器	鏡	②	-	32	-
	16 L1	0.25	0.1	土師器	小片	②	-	-	-
	22 M2	0.3	0.17	須恵器	鏡	-	-	56	-
	24 L1	0.18	0.23	土師器・須恵器、 鏡	十脚器小片、須恵器蓋	鉄鋤	②2箇×2箇の東西接続柱建柱跡 跡跡か(SP07- 24-25-74-76-99-SK05)	-	-
	27 K3	0.25	0.19	鏡	器物面(草花?)	-	-	72	-
	41 L3	0.21	0.15	土師器	小片	-	-	-	-
	49 K4	0.25	0.23	土師器	小片	-	③3箇×3箇の南北棒建柱跡建柱跡か (SP31-34-38-49-58-90-96)	-	-
	51 K3	0.24	0.1	須恵器	鏡小片	-	-	-	-
	52 K3	0.25	0.1	土師器	小片	-	-	-	-
	53 K3	0.43	0.22	土師器	小片	-	-	-	-
	55 K3	0.37	0.15	土師器・須恵器	土師器・鏡・小片、須恵器・小片	-	-	-	-
	58 K3	0.23	0.29	土師器	鏡底部	-	SP09を切る・④	-	-
	60 K3	0.29	0.23	土師器	小片	-	SP09を切る・④	-	-
	61 J3	0.4	0.3	土師器	小片	青	-	-	-
	65 M3	0.25	0.16	土師器	小片	-	-	-	-
	69 J4	0.4	0.17	土師器	小片	-	-	-	-
	70 J4	0.33	0.17	土師器	小片	-	-	-	-
	72 L3	0.53	0.34	須恵器	鏡	-	-	-	-
	73 K3	0.29	0.25	土師器	鏡小片、小片	-	-	-	-
	76 M1	0.18	0.17	須恵器	鏡	-	⑤	-	-
	77 L1	0.27	0.21	弥生土器	鏡小片・高杯	-	SK18を切る	-	-
	85 K3	0.26	0.13	土師器	小片	-	-	-	10
	87 J4	0.2	0.13	土師器	鏡蓋、小片	-	-	-	-
	98 K2	0.24	0.18	土師器	小片	-	-	-	-

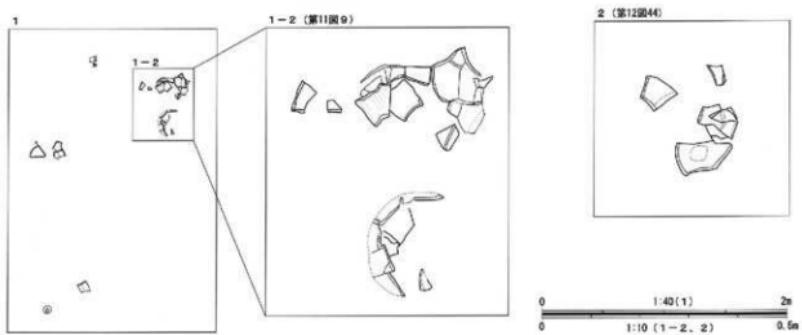
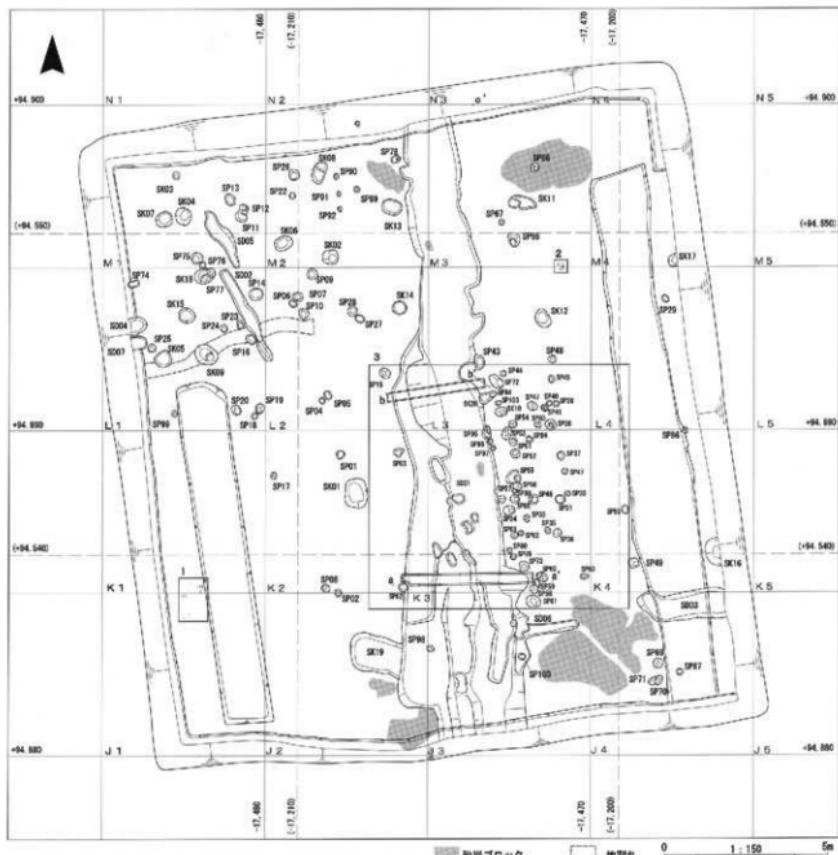
第2表 遺物出土遺構一覧表

No.	地区	遺物・位置	種別	形態	古 金 (m)		出土	試験	色 調	保存率	備考
					口径	高さ					
1	L1	S K96	土器類	皮	13.2	西底3.0	-	赤	1978/3浅黄褐色	6%未調	口縁付筒状土器軸束X3
2	S2	三層	土器類	有蓋盒	16.8	底存4.35	-	赤	赤茶 1978/4深褐色	5%未調	口縁付筒状土器軸束X2
3	M4	五層	土器類	底凸台	隨存6.8	底存3.15	-	赤	1980/4褐色	8%	口縁付筒状文
4	M5	三層	土器類	小鉢形	10.0	底存4.85	-	赤	1978/4褐色	10%	円筒状文 (2選)
5	L1	S D04	生糞土器	有蓋盒	11.6	底存3.75	-	中や赤	赤茶 1978/4深褐色	5%未調	口縁付筒状文
6	K1	四層	生糞土器	有蓋盒	15.9	底存3.8	-	赤	7.5/85/32/25-褐色	5%未調	
7	J2	五層	土器類	有蓋盒	34	底存3.5	-	赤	7.5/86/6褐色	5%未調	
8	M3	四層	土器類	豆	13.6	底存4.6	-	赤	1978/3褐色	5%未調	
9	E1	四層	土器類	豆	14.6	33.6	5.85	赤	7.5/87/4深褐色	未調	古墳御殿
10	J4	S P87	土器類	有蓋盒	30.8	西底3.2	-	赤	1978/3褐色	5%未調	
11	E1	三層	土器類	有蓋盒	17.0	西底3.95	-	中や赤	1978/3にぶい褐色	5%未調	
12	M1	五層	土器類	圓筒形	15.9	底存3.8	-	赤	1978/3深褐色	8%	口縁付筒状X2
13	S1	五層	生糞土器	有蓋盒	13.6	西底3.9	-	赤	8.0/6褐色	10%	
14	X1	四層	土器類	燒	21.2	底存3.0	-	赤	1978/3褐色	10%	
15	L1	S D07	土器類	蓋付?	13.7	底存2.8	-	赤	1978/4C/25-深褐色	5%未調	
16	K1	1層	土器類	付加装置	18.8	底存3.2	-	赤	赤茶 1978/4深褐色	5%未調	
17	X1	S K16	土器類	平底盤	21.9	西底3.05	-	赤	1978/4褐色	5%未調	赤茶系／くの字口縁／直筒形
18	M5	三層	土器類	盤小	-	底存3.15	4.35	赤	7.5/86/6褐色	8%	
19	L3	S D01	土器類	凸环	22.0	底存3.0	-	赤	1978/3褐色	5%未調	
20	L4	五層	土器類	高杯	31.6	底存4.0	-	赤	1978/4にぶい褐色	8%	
21	E3	S D01	生糞土器	高杯	-	底存3.9	-	中や赤	1978/3にぶい褐色	8%	
22	L2	三層	土器類	圓筒形器	18.6	西底3.05	-	赤	7.5/86/3にぶい褐色	5%未調	円筒形器X2
23	L1	S K18	土器類	有蓋盒付	24.6	底存3.45	-	赤	1978/4C/25-褐色	5%未調	赤茶系／くの字口縁／直筒形
24	L1	S D04	生糞土器	有蓋盒付	20.7	底存3.2	-	赤	7.5/86/4褐色	5%未調	
25	S4	S K16	土器類	盤付	16.7	底存4.1	-	赤	1978/4深褐色	8%	赤茶系／直筒形
26	X1	赤底器	小圓盤	11.3	西底3.45	-	赤	7.5/87/4C/25-褐色	8%	透光アリ／口縁付の器和材多量に含む	
27	L1	S D04	生糞土器	裝飾盤付	20.7	底存3.45	-	赤	1978/4C/25-褐色	10%	透光による装飾／新規瓦刀孔透孔
28	L3	S D01	土器類	高杯	圓筒3.1	底存3.05	8.0	中や赤	1978/3にぶい褐色	20%	
29	L1	S D04	生糞土器	高杯	圓筒3.8	底存3.35	-	赤	1978/3にぶい褐色	8%	
30	S2	五層	土器類	高杯	圓筒3.7	底存3.55	-	赤	7.5/86/4褐色	20%	
31	D2	S P15	土器類	盤付	19.8	西底3.35	-	赤	1978/3にぶい褐色	5%未調	透財通孔
32	S2	五層	土器類	盤付	19.6	西底3.45	-	中や赤	7.5/87/4C/25-褐色	20%	透光A方向
33	S4	四層	土器類	盤付	19.6	西底3.45	-	中や赤	7.5/87/4C/25-褐色	20%	外側底部
34	M4	五層	土器類	盤付	19.6	西底3.45	-	中や赤	1978/3にぶい褐色	20%	
35	L1	S K09	土器類	盤付	14.6	西底3.17	-	赤	7.5/87/4C/25-褐色	8%	盤付透孔4方
36	M4	五層	土器類	盤付	14.7	3.0	7.8	赤	5/50/6褐色	7%	
37	M5	S K11	土器類	盤付	15.8	底存3.2	-	赤	1978/3にぶい褐色	8%	
38	M5	三層	土器類	盤付	15.7	西底3.05	-	赤	5/50/6褐色	10%	白色輝石・赤褐色斑状和材多量に含む
39	L1	S D07	土器類	盤付	15.4	底存3.2	-	赤	1978/3にぶい褐色	10%	
40	M5	三層	土器類	盤付	15.4	底存3.09	-	赤	5/57/3灰褐色	10%	
41	K1	四層	土器類	盤付	14.6	西底3.55	11.35	赤	5/57/3にぶい褐色	8%	
42	M4	五層	土器類	盤付	14.6	西底3.17	-	赤	5/57/3にぶい褐色	8%	
43	L2	五層	土器類	ミニチュア	4.1	4.3	2.4	赤	7.5/86/4C/25-褐色	8%	
44	J2	五層	土器類	ミニチュア	5.6	3.8	2.9	赤	1978/3にぶい褐色	8%	
45	M4	五層	土器類	杯	12.0	8.0	2.0	赤	5/52/2褐色	50%	透財通孔T11～12斜行／3～6世紀
46	L4	四層	土器類	杯	12.6	2.45	9.0	赤	5/52/2褐色	8%	
47	L1	S P14	中住・脚付?	皿	11.8	底存3.0	-	赤	5/52/2褐色	8%	
48	L2	S D01	土器類	皿	-	底存4.05	-	赤	5/52/2褐色	8%	
49	K4	S L03	中住土器類	皿	8.3	4.8	2	中や赤	5/52/2褐色	8%	
50	K3	S D01	土器類	土器	最大径3.1	3.6	直底1.3	赤	5/52/2褐色	8%	
51	S2	五層	土器類	土器	1.4	底存3.4	-	赤	5/52/2褐色	8%	
52	M5	五層	土器類	皿G蓋	-	底存3.7	-	赤	5/52/2褐色	8%	
53	J2	五層	土器類	杯	15.7	底存3.9	-	中や赤	5/52/2褐色	8%	
54	J3	S D41	圓筒形	杯	12.6	2.45	9.0	赤	5/52/2褐色	8%	
55	L1	S D06	樂器類	杯	12.9	西底3.65	-	赤	5/52/2褐色	8%	
56	L5	四層	樂器類	杯A	12.6	底存3.2	8.4	赤	5/52/2褐色	8%	
57	M2	S P22	樂器類	杯身	13.5	3.5	直底1.3	赤	5/52/2褐色	8%	
58	J2	S D01	樂器類	杯身	-	底存2.55	直底2.1	中や赤	5/52/2褐色	8%	
59	L3/3	S D01	樂器類	杯身	-	西底1.65	直底0.7	赤	5/52/2褐色	8%	
60	K2	五層	樂器類	杯身	-	底存1.9	直底0.9	中や赤	5/52/2褐色	8%	
61	J1	S D41	圓筒形	杯身	-	底存1.9	直底0.6	赤	5/52/2褐色	8%	
62	L2	五層	樂器類	杯身	11.4	底存3.19	-	赤	5/52/2褐色	8%	
63	L2	五層	樂器類	大甕	-	-	-	赤	5/52/2褐色	8%	
64	L2	五層	樂器類	大甕	-	西底4.5	-	赤	5/52/2褐色	8%	内側に複数縦溝文・S字縫合部
65	M3	S D01	圓筒形	椎体	22	底存3.3	-	中や赤	良好	8%	
66	J2	S K19	圓筒形	椎体	31.1	底存4.5	-	中や赤	不良	8%	
67	J2	S D01	圓筒形	椎体	34.7	底存3.73	-	赤	良好	8%	
68	K1	五層	樂器類	椎体	-	-	-	赤	良好	8%	
69	H1	五層	樂器類	椎体	-	-	-	赤	良好	8%	
70	K2	S D01	樂器類	椎体	-	-	-	中や赤	良好	8%	
71	K3	S D04	樂器類	椎体	-	西底4.5	19.2	中や赤	良好	8%	
72	K3	S F37	樂器類	椎体	-	-	-	赤	良好	8%	
73	K3	五層	樂器類	椎体	-	-	-	赤	良好	8%	
74	L3	S K20	樂器類	椎体	-	-	-	赤	良好	8%	
75	M3	五層	樂器類	椎体	-	-	-	赤	良好	8%	

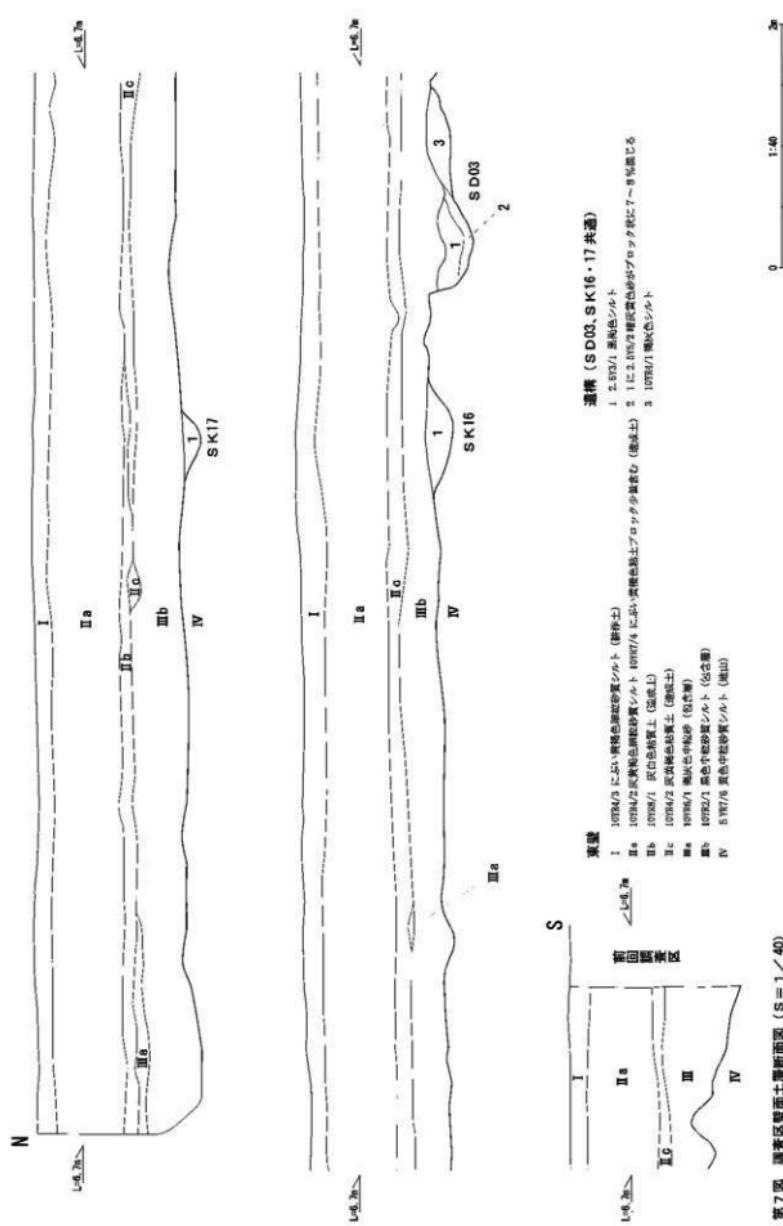
第3表 遺物観察表

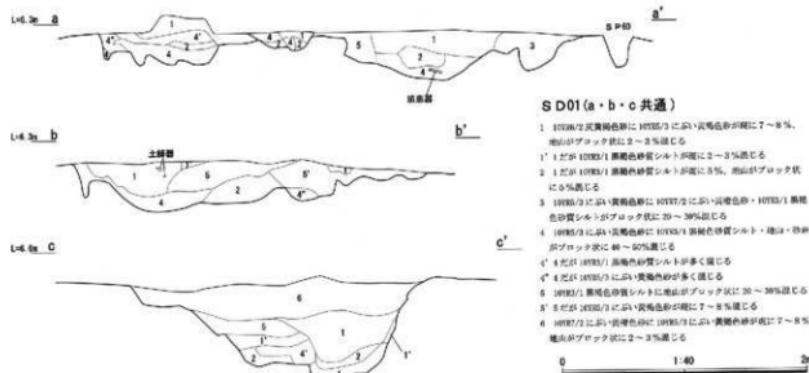
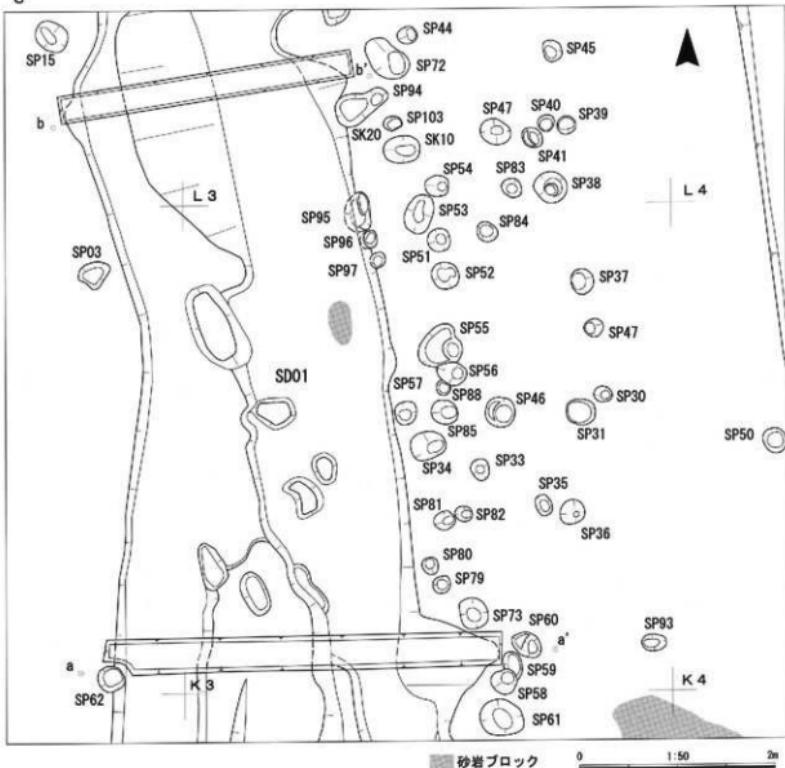


第5図 調査区（KRKE-2011, 2012）合成図 ( $S = 1/250$ ) 平面直角座標系第VII系 ( ) で表している座標値は日本測地系  
①～④は第2表参照

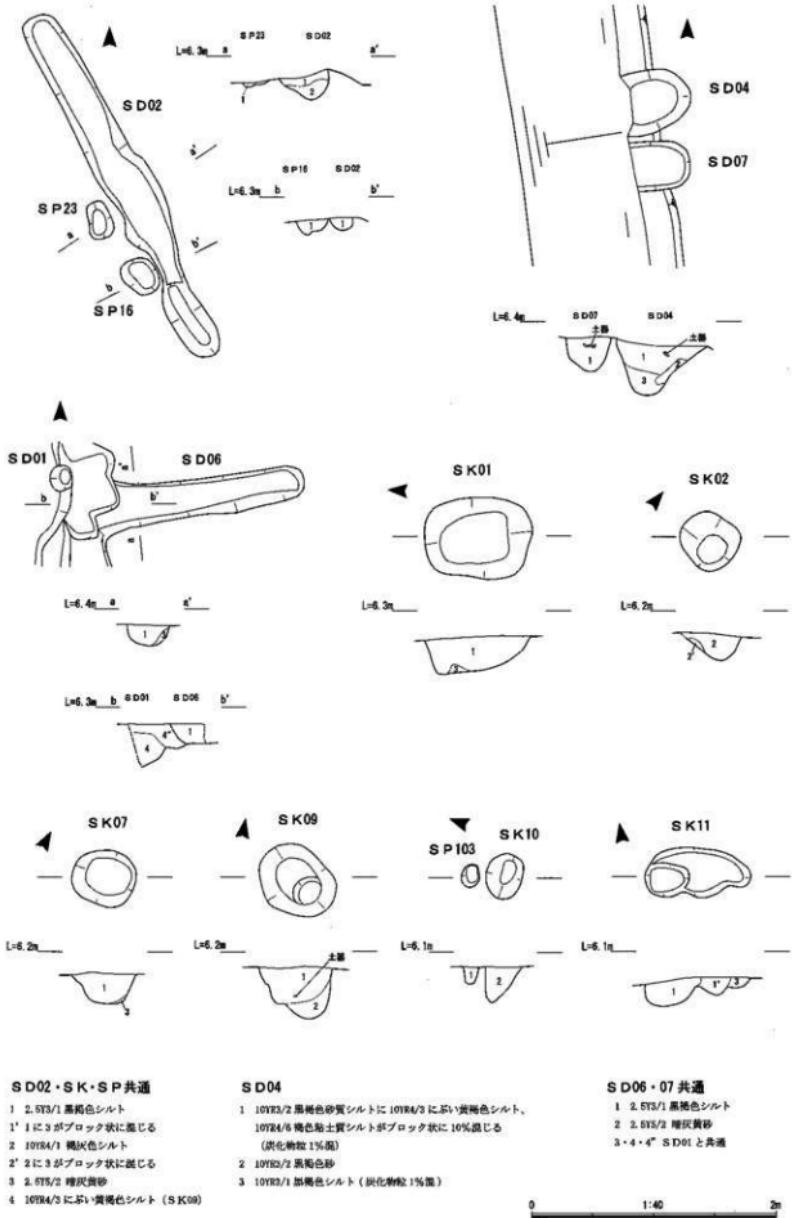


第6図 調査区全体図 ( $S = 1/150$ ) 平面直角座標系第VII系 ( ) で表している座標値は日本測地系  
遺物出土状況図 1 ( $S = 1/40$ ) 2・3 ( $S = 1/10$ )

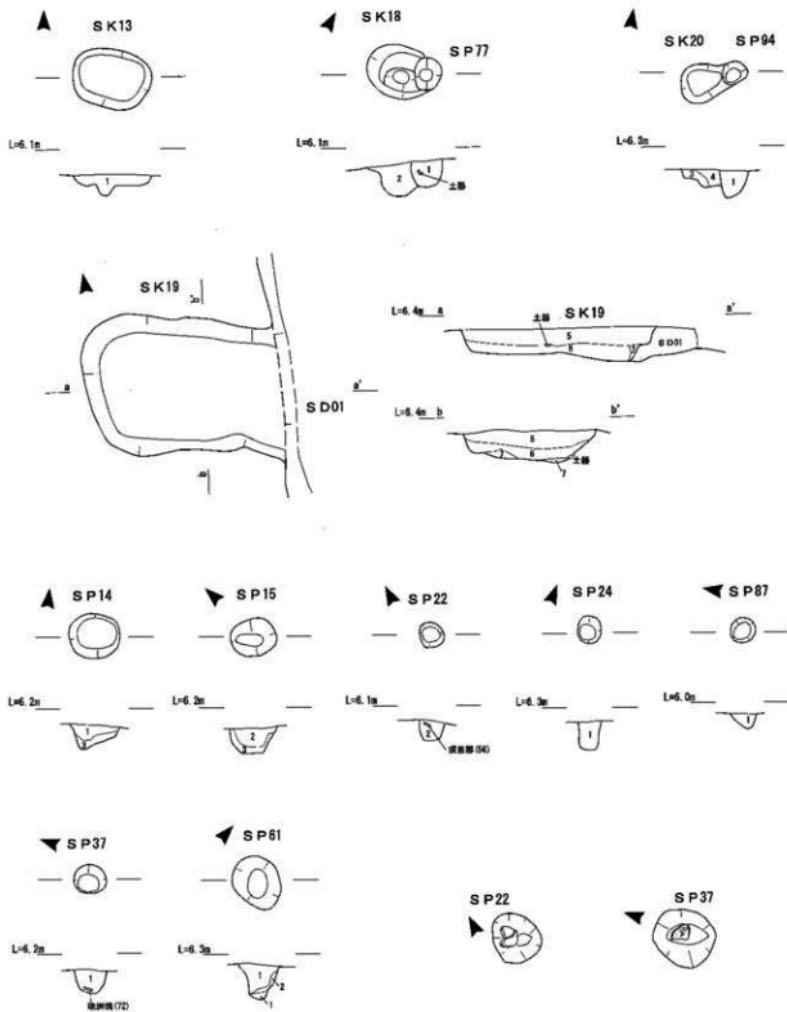




第8図 遺構実測図 (1) 調査区部分図 (全体図3) (S = 1 / 50) SD01 土層断面図 (S = 1 / 40)



第9図 道横実測図 (1) S D02 (S P16・23)・04・06・07, S K01・02・07・09・10・11・13・18 (S P77)



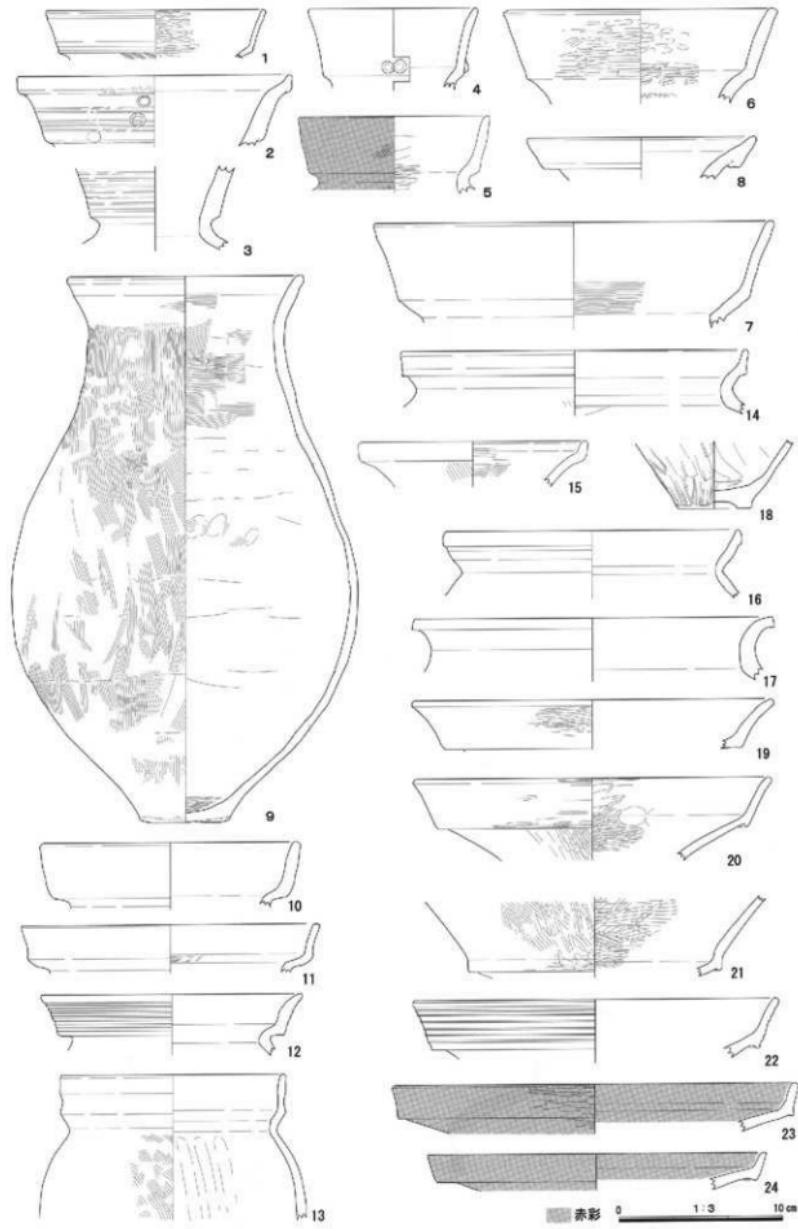
#### SP・SK共通

- |                   |                                 |
|-------------------|---------------------------------|
| 1 2. SY3/1 基礎色シルト | 4 10YR3/1 黒褐色砂質シルト (SK20)       |
| 1' 1に3がブロック状に覆じる  | 5~7 (SK19)                      |
| 2 10YR4/1 黑褐色シルト  | 5~7 SY3/1 黑褐色シルトに地山がブロック状に覆じる   |
| 2' 2に3がブロック状に覆じる  | 6 2. SY4/2 緑灰黄色シルトに地山がブロック状に覆じる |
| 3 2. SY5/2 増灰黄土   | 7 2. SY6/4 ぶい 黄色沙質土             |

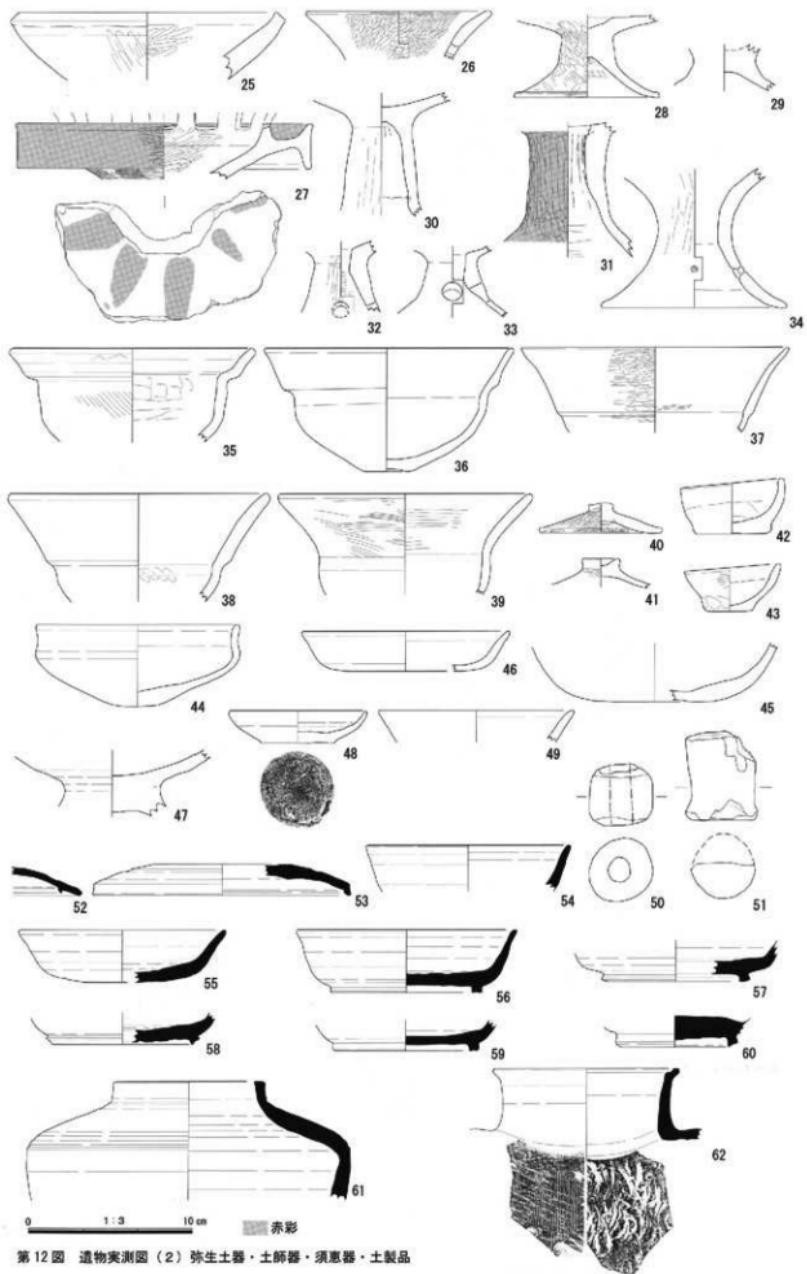


第10図 造構実測図(2) SK13・18・19・20 (SP94)、SP14・15・22・24・37・61・87

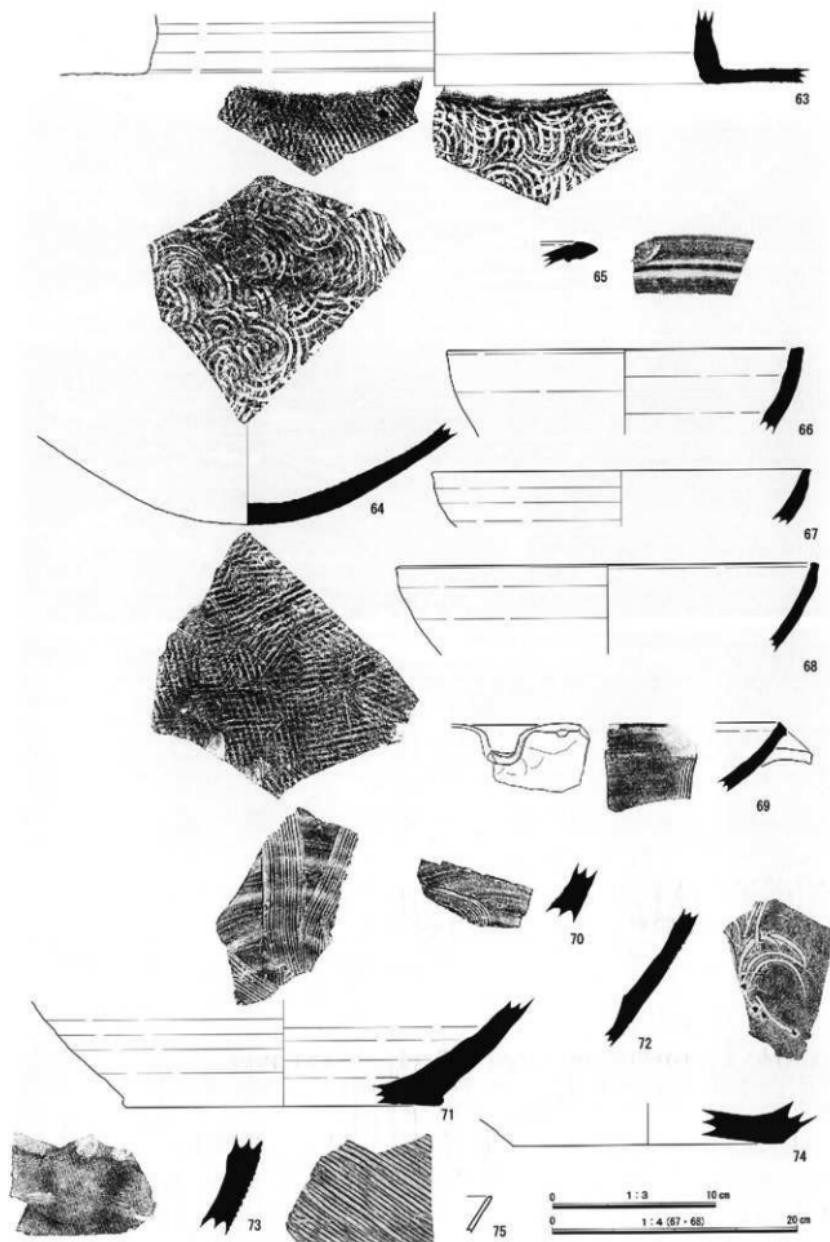
遺物出土状況 SP22・SP37



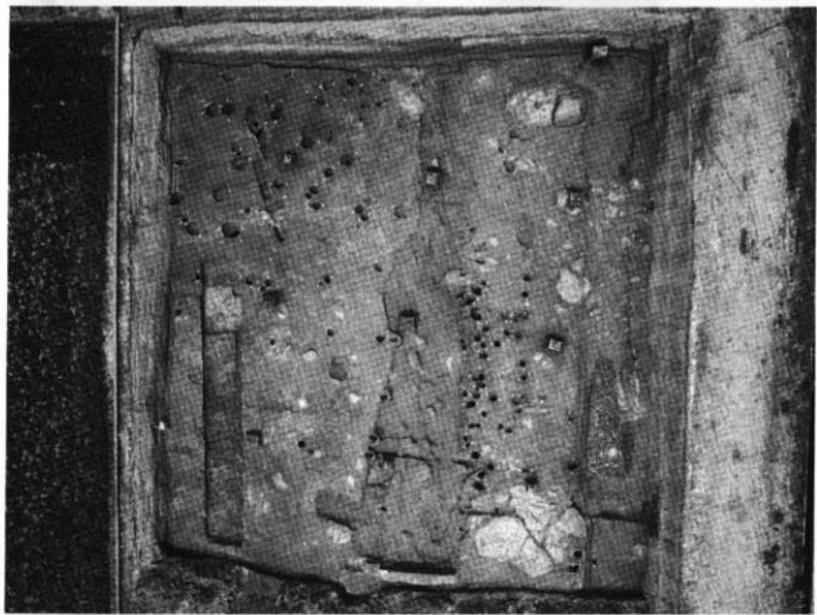
第11図 遺物実測図（1）弥生土器・土師器



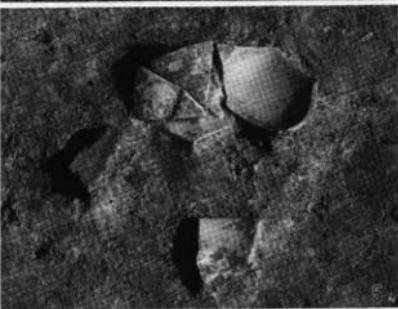
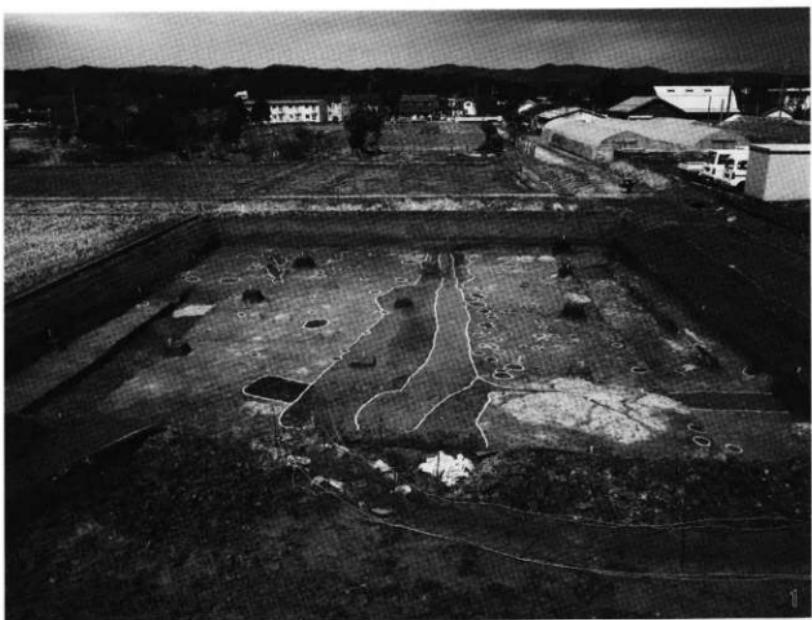
第 12 図 遺物実測図 (2) 弥生土器・土師器・須恵器・土製品



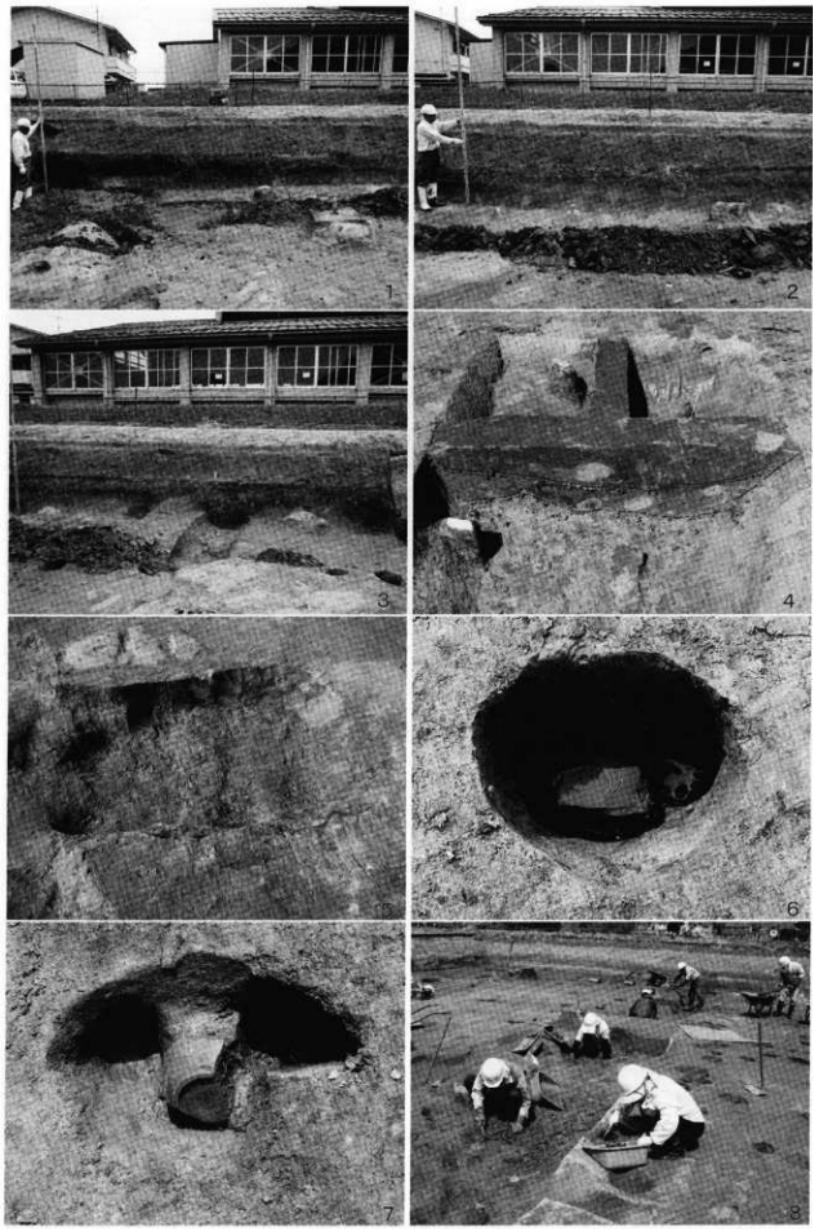
第13図 遺物実測図（3）須恵器・珠洲焼・白磁



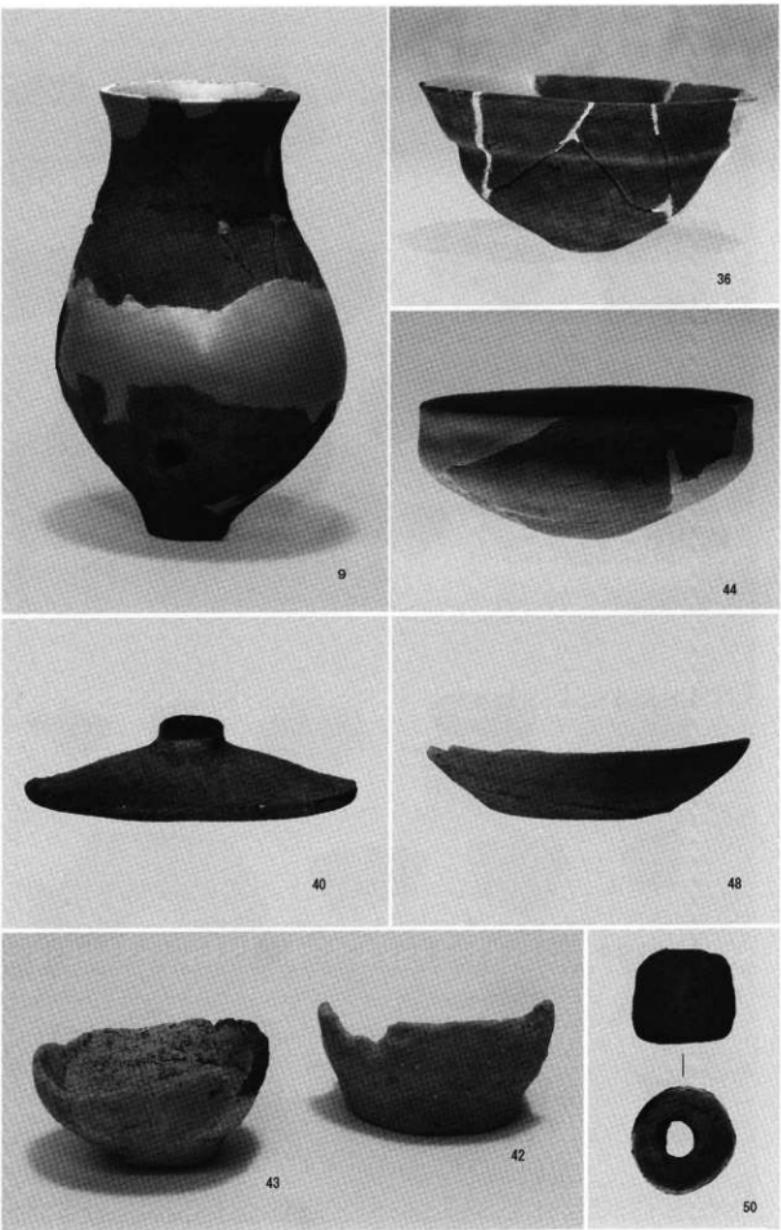
図版1 1. 調査区遠景（東から） 2. 調査区全景（垂面）



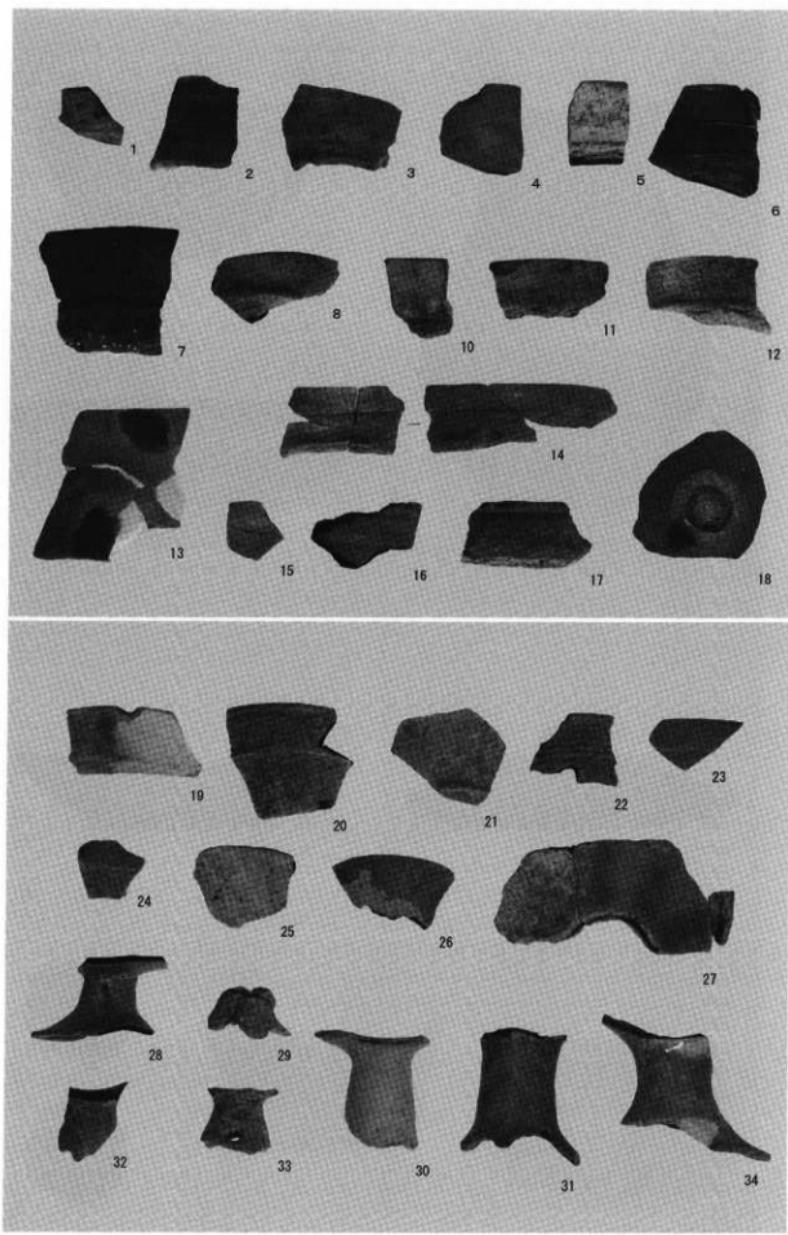
図版2 1. 遺構検出状況（南から） 2. SD01-C土層断面（南から）  
3～5. 包含層遺物出土状況（3. 東から 4. 西から 5. 東から）



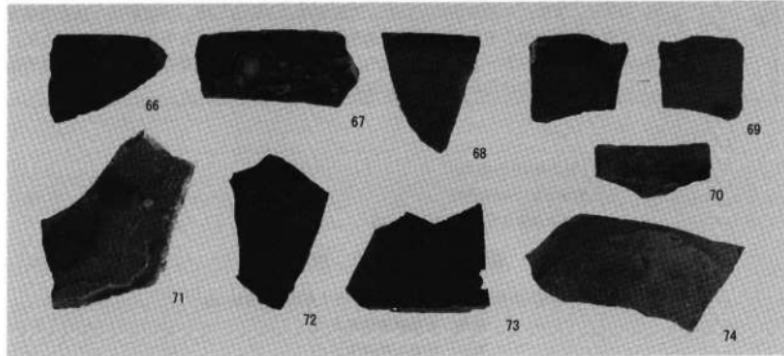
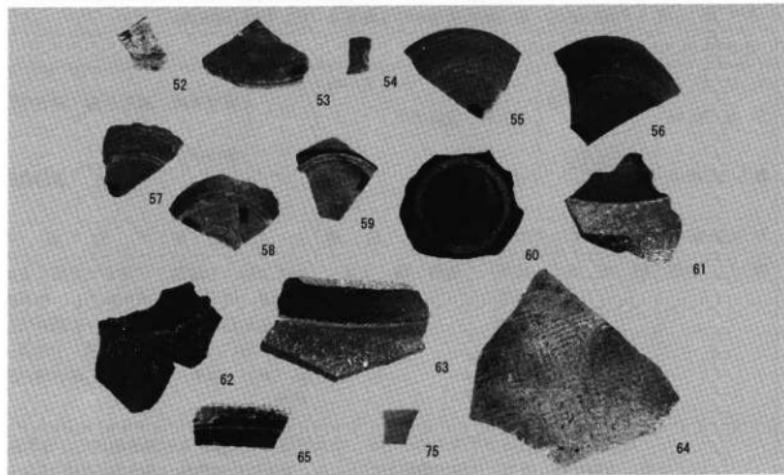
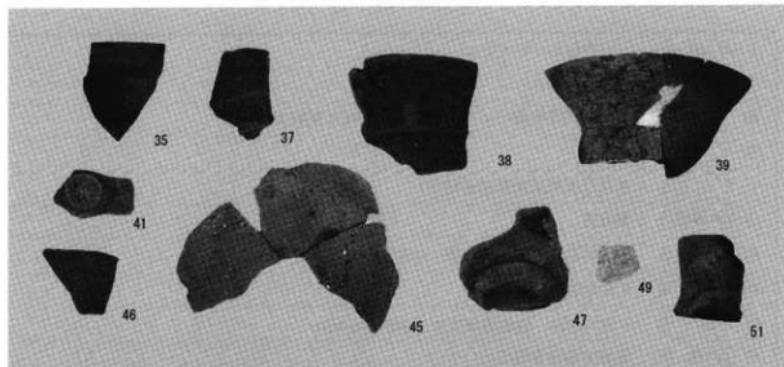
図版3 1～3. 調査区東壁土層断面(北端一南端)  
5. SK19完璧(北から)  
7. SP22遺物出土状況(北から)  
4. SK19断面(東から)  
6. SP37遺物出土状況(西から)  
8. 作業風景(SD01遺構掘削)



図版 4 遺物写真 1



図版 5 遺物写真 2



図版6 遺物写真3

## 報告書抄録

ふりがな	くらかわいーいせきに						
書名	鞍川E遺跡Ⅱ						
副書名	市道鞍川熊峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告						
卷次	2						
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第61冊						
編著者名	廣瀬直樹、朝田要、橋日奈子						
編集機関	北陸航測株式会社						
所在地	〒933-0866 富山県高岡市清水町3-4-40						
発行機関	氷見市教育委員会						
所在地	〒935-0016 富山県氷見市本町4番9号 TEL 0766(74)8215						
発行年月日	2012年7月18日						
ふりがな 所収遺跡	所在地 市町村	コ一ド 遺跡番号	北緯 °'〃	東經 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
鞍川E遺跡	富山県氷見市 鞍川	16205	394 47'' 26''	36° 03' 02"	137° S 20120305 20120420	361m <sup>2</sup>	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鞍川E遺跡	散布地	弥生 古代 中世	流路、溝、土坑 ピット	弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、中世土師器、土製品（土鍤）、石製品（磨石、砥石）、鉄滓	中世まで存続する流路を検出し、弥生時代終末～古墳時代前期の土器、土師器、須恵器、珠洲焼が出土した。		
要約	規則性がみられる中近世のピット群、中世以降まで存続する流路を検出し、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺物が出土した。弥生時代の遺物は終末期の白江式が中心である。また、この時期のものとして装飾器台が出土した。古墳時代の遺物は前期までの土師器が中心である。古代の遺物は須恵器・土師器とともに土鍤が出土した。時期は主に8世紀末～9世紀代である。中世の遺物は中世土師器・珠洲焼・白磁が出土しており、時期は12世紀後半～13世紀前半を主体とする。						

平成24年7月18日印刷  
 平成24年7月20日発行  
 氷見市埋蔵文化財調査報告第61冊

### 鞍川E遺跡Ⅱ

市道鞍川熊峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（2）

編集 北陸航測株式会社

発行 氷見市教育委員会

印刷 株式会社トーザワ